

石碑の路・万葉集東歌解説

北川 和秀

◎「石碑の路」の万葉歌碑のうち、上野国東歌は十一首、上野国防人歌は二首、未勘国東歌は八首。これらのうちの何首かについての解説を行う。

◎「石碑の路」の万葉歌碑のうち、東歌・防人歌以外の歌碑（柿本人麻呂や大津皇子など）の大半は大澤雅休氏（高崎市出身の書家。昭和二十八年没）の揮毫したもの。

【上野国東歌】

①日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ（三四〇二）歌碑6
碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはつきりとお振りになった。

*「日の暮に」は枕詞。碓氷峠を越える日に、家の門口のあたりで別れた姿が忘れられない

②吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも（三四〇三）歌碑4

私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないことだ。

*「奥」には空間・時間的な意味がある。それを掛けた

③伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し良かば（三四一〇）歌碑C

（榛名山の急斜面のハンノキ林の地中で絡み合っている根のように）こまごまと将来のことまで心配することはない。今さえ幸せならば。）

*伊香保は榛名山。「根もころ」は「ねんころ」

④伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（三四二一）歌碑23
榛名山に雷よ鳴ってくれるな。私はどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね。

*「子ら」は彼女。単数

⑤伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）歌碑27
毎日吹く榛名おろしだつて、たまには吹かない日もあるというけれど、私があるあなたを思う恋心ばかりは、止むときがないことだ。

*冬の北西の季節風。榛名山の南東麓の地が舞台か

- ⑥ 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝ては（三四一四）歌碑14
（榛名山麓の高い井堰の上に現れる虹はつきり見えるように）はつきり二人の仲が明らかになつてしまうほど、共寝をしていられたらなあ。
* 万葉集中、虹がよまれた唯一の歌。

- ⑦ 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）歌碑12
（利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに闇雲に渡って波を受けてびっくりしたように）突然あなたに出会ってびっくりしたことだ。

* 作者は女性。かつての体験を思い出して、比喩に用いた

- ⑧ 上毛野伊奈良の沼の大藺草他所に見しよは今こそ益れ（三四一七）歌碑D

上野国の伊奈良の沼に生えていた大藺草は、刈り取って織り上げた今の方が美しい。
|| 片思いの状態だったときよりも、恋人同士になった今の方が、あなたはもつとすてきだ。

* 大藺草は太藺という植物で、藺草よりも大きい。「よは」は「よりは」という意

【上野国防人歌】

- ⑨ 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（四四〇四）歌碑③
難波への道を行って帰って来るまで御無事でと、妻が着けてくれた紐が、長い旅で擦り切れてしまったことだなあ。

* 難波は通過点に過ぎないが、妻は理解していない

- ⑩ 吾が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（四四〇六）歌碑13

私の家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、旅はつらいと告げに行ってもらうのに。

* 防人として任地に赴く道中での望郷の歌

【未勘国東歌】

- ⑪ 佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか子ろが面に見えつる（三四七三）歌碑3・G
（佐野山で打つ斧の音が遠くに聞こえるように）遠く離れたところにいるけれども、私と共寝をしたいというのか、あの娘の姿が面影に見えた。

* 「子ろ」は彼女。相手が思ってくれると、こちらの夢に現れるという発想

※これら以外の東歌の歌碑

①上毛野佐野の莖立ち折りはやし吾は待たむゑことし来ずとも（三四〇六）歌碑 25

上野国の佐野の菜を折っておまじないをして頻繁なお出でをお待ちします。今はたとえあなたがあまりお出でにならなくても。上野国東歌

②伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいざ寝しめとら（三四〇九）②

榛名山から次々と雲が懸かってゆくようにしきりに騒いでいた人々が静かになつた。さあ、共寝をさせてくれ、お前（あるいは「とらよ」）上野国東歌

③上毛野可保夜が沼のいはるつら引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）歌碑 24

（上野国の可保夜の沼のイハキツラは、引っ張ってもずると寄って来て切れない。そのように）私との仲を絶やさないで欲しい。上野国東歌

④東路の手児の呼坂越えがねて山にか寝むも宿は無しに（三四四二）B

東国へ行く道の途中にある手児の呼坂を越えられずに、山で寝ることだろうか。仮寝の場所もないままに。未勘国東歌

⑤東路の手児の呼坂越えて去なば吾は恋ひむな後は逢ひぬとも（三四七七）A

東国へ行く道の途中にある手児の呼坂をあなたが越えて行かれたら、私は恋しいことでしょう。たとえ後で再会できるとしても。未勘国東歌

⑥遠しとふ故奈の白嶺に逢ほ時も逢はのへ時も汝にこそ寄され（三四七八）8

遠いという故奈の白嶺であなたと逢うときも、逢わないときも、私はあなたといい仲だと人から噂されている。未勘国東歌

⑦伊波保ろの岨の若松限りとや君が来まさぬうらもとなくも（三四九五）④

（岩場の急斜面に生えている若い松ではないが）もう限界というつもりだろうか、あなたは来ない。私は心もとなく思っているのに。未勘国東歌

⑧一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の寄そり妻はも（三五一一）⑤

一つの峰のようだと（夫婦のようだと）人からは言われているけれど、実は青々とした峰の上でぐずぐずしている雲のようにためらっている、噂ばかりの妻は、ああ。

未勘国東歌

⑨妹をこそあひ見に来しか眉引の横山辺ろの鹿猪なす思へる（三五三一）11

私は彼女に会いに来ただけなのに、その私を横山あたりをうろつく鹿や猪のように思いやがって。未勘国東歌

⑩阿須可川塞くと知りせば数多夜も率寝て来ましを塞くと知りせば（三五四五）7

阿須可川を塞き止めると知っていたなら、幾晩でもこっそりと連れ出して共寝をしたのに。塞き止めると知っていたなら。未勘国東歌